

地球という大きな家族

学校法人原田学園私立鹿児島情報高等学校 1年 永井 海光

私の地元、奄美大島。九州地方に甚大な被害をもたらした台風6号の影響を受けた島の1つである。そして台風によって今回は、奄美に10日間船が入ってこなかった。

今、この文章を読んだ人の中で、島民にとって船が入って来ない事が死活問題だと考えた人はどれだけ居ただろうか。奄美で船が止まるということは、トイレトペーパーなどの日常生活品はもちろんのこと、食料さえも入ってこないということなのだ。船が止まって1日、2日は備蓄していた食料で持った。そのあとは、スーパーやコンビニから一切の食料が消え、商品がない為に次船が入るまで閉店するという店も多く出てきた。そこから私の家でも「お米がない」「トイレトペーパーが無くなった」「野菜がなくなってしまった」という状況であった。

今回の台風で食料の確保が難しくなった時、学校のSDGsの授業が頭の中をよぎった。それは、毎日の食糧に困り、物乞いして日々一生懸命に生きているサヘル地域の子供達や危険を冒して店から食料を盗む子供達についてである。もちろん状況は大きく違うが、10日間食料確保が難しい状況に陥り、なぜそのような行動が起きるのか、またひどければ犯罪を起こしてしまう理由が少し分かったように感じる。

世界には飢餓問題に苦しむ国が多くあり、WFPが出している資料には『2023年、世界の3億4500万人が高いレベルの食糧不足になるだろう』(※1)と書かれている。また、その中の90万人は飢餓の中でも最も深刻な飢きに近い状態になるそうだ。そして、世界だけではなく、私が生活している日本でも20人に1人が飢餓を経験している。中央アメリカやサヘル地域、中央アフリカ、アフリカなど飢きのホットスポットになっている国では、私がたった数日体験した

ひもじい思いを生まれてから何年も抱えているのかと思うと、胸がぎゅっと締め付けられるような苦しい思いだった。

今日の世界で問題視されている飢餓を終わらせるために私にできる方法はいったいどのようなものがあるのだろうか。私が思いつくまず1つ目は「地産地消」の促進である。地産地消は「地元で生産、地元で消費」という意味であるが、生活をする一人一人が何なら自分にも育てられるかを考え、知ることが出来たら何か変わるのではないかと考えた。

私も今回野菜がお店から消え、確保が出来なかったことから、母と家庭菜園を始めてみた。以前も育てた経験があったネギならできるのではないかと考え、それから、ローズマリーやハンダマ、バジル、四角豆の栽培を始めた。もちろん今はまだ始めたばかりで十分な量ではないが、今後もっと栽培ノウハウを身に付け、拡大させていきたいと考えている。2つ目は、「現状を知る」ことだと考える。これから先、この飢餓問題を解決していくためには持続的にその問題から抜け出すためには、栄養教育や栽培研修などといった自立支援が必須であると考える。しかし、今私が出来ることであろうことを考えると自分自身の知識を増やし、世界の現状を知ることである。そのうえで、ユニセフやNGOなどの組織に寄付を行うことである。10円や100円など少額でも寄付することで、私たちでも発展途上国の開発に介入することができる。寄付というと少しハードルが高い感じや、硬い感じがする。しかし寄付付きの商品を購入することで普段のショッピングと共に寄付を簡単に行うという方法もある。

私の家庭菜園や、寄付はとても小さな一歩だろうと思う。しかし、この活動を私が友だちに広げたら、その友だちがまたその友だちに広げたら、一人の小さな一歩が大きな一歩へと変わるのではないだろうか。飢餓は国と国の問題ではない、地球という大きな家族の問題である。海を挟み大陸を飛び越えた遠い地にいる私の兄弟、姉妹を助けるために今日もまた私は小さな一歩を踏み出そうと思う。

出典 ※1『2023年、世界の3億4500万人が高いレベルの食糧不足にあるだろう』

<https://ja.wfp.org/publications>